

令和 6 年 6 月 13 日現在

機関番号：12501
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2019～2023
課題番号：19K02595
研究課題名（和文）幼児教育におけるソーシャルキャピタルを核とした健康発達資産の醸成に関する研究

研究課題名（英文）Research on Fostering Health Developmental Assets with Social Capital at the Core in Early Childhood Education

研究代表者
三森 寧子（Mitsumori, Yasuko）
千葉大学・教育学部・准教授

研究者番号：70633395
交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,400,000円

研究成果の概要（和文）：幼児期のソーシャルキャピタルを核とした発達資産を明らかにし、それに基づいた発達資産を醸成するためのプログラムを作成することで、幼児教育における健康づくりについて取り組んだ。健康寿命が高い地区を対象に調査を実施し、子育て中の保護者の意識や幼稚園の教諭ならびに養護教諭の幼児の健康に対する意識を明らかにした。保護者はその地区で子育てしたいと考えており、その要因としては幼稚園が住民同士のつながりの基盤となって、幼稚園での経験やつながりがソーシャルキャピタルの醸成をもたらしていた。幼稚園を拠点とすることで幼児期からの健康づくりが可能であり、幼児期のヘルスプロモーションについて重要な示唆を得た。

研究成果の学術的意義や社会的意義
文献検討や調査等から、子どもの健康や成長発達を考える上で、親の健康についても着目すべきであることが明らかになった。そのなかでもソーシャルキャピタルの醸成が子育て支援にも有効であることが改めて示唆された。生涯を通じたヘルスプロモーションを考えたとき、幼児期からの健康支援が重要であるといえ、幼児が通う幼稚園が重要な役割を果たすことも明らかとなった。このことから、幼稚園を拠点とした健康づくりについて取り組む必要性が示され、ソーシャルキャピタルの醸成は地域づくりにもつながる重要な示唆が得られた。

研究成果の概要（英文）：We worked on health promotion in early childhood education by identifying developmental assets centered on social capital in early childhood and creating a program to foster developmental assets based on these assets. A survey was conducted in a district with a high rate of healthy life expectancy to determine the attitudes of parents raising children and the attitudes of kindergarten teachers and school nurses toward the health of young children. Parents wanted to raise their children in the district, and the kindergartens served as a foundation for connection among residents, and the experiences and connections at the kindergartens fostered social capital. Using kindergartens as a base for health promotion from early childhood was possible, and important implications for health promotion in early childhood were obtained.

研究分野：公衆衛生看護

キーワード：子どもの健康 ソーシャルキャピタル 親の発達 ヘルスプロモーション 地域づくり

1. 研究開始当初の背景

現在、健康に関する概念にはヘルスプロモーションが用いられ、幼稚園や認定こども園などの幼児教育場面においても取り組みがなされている。しかしながら、ヘルスプロモーションにおいて推奨されている環境改善や地域活動の強化は現実には実行が難しく、有名無実化している現状もある。そこで、地域の信頼関係やネットワークづくりに有用であるソーシャルキャピタルを核とした幼稚園教諭や保護者といった人的側面と、幼稚園を中心とした物理的環境づくりの2側面に着目し、幼児が健康に発達するため資産を醸成する必要がある。

特に、地域や幼稚園、保護者がネットワークのなかで幼児の健康に発達するための資産を作る環境は乏しい。また、少子高齢化や核家族化などにより地域を支えてきた人と人との関係性が希薄化し、子育てをする親が育児不安やストレスにより孤立状態になり、児童虐待などの社会問題につながっている¹⁾。そのため、地域のネットワークを強化し、社会全体で幼児期において健康発達のための資産を醸成する取り組みが必要である。

実際に平成28年度幼稚園において、死亡事例3件、負傷事故は19、270件と多くの事故やけがが発生している²⁾。しかし学校教育法、幼稚園設置基準において、学校保健の中核的存在をなす養護教諭や保健室は必置ではなく、幼稚園における健康や安全が守られているとは言い難い。幼稚園教育要領では、「健康」領域において「健康な心と体を育て、自ら健康で安全な生活をつくり出す力を養う。」ことをねらいとしているが、幼児期の健康教育は、幼稚園や担当者の裁量に任されており、内容の精選にはいたっていない。つまり、幼児教育における保護者や地域を包含した地域社会における健康づくりは取り組むべき課題といえる。

引用文献

- 1) 傳馬淳一郎：「子育て支援」概念に関する研究 親子を取り巻く環境と支援の機能 - ,北星学園大学大学院社会福祉学研究所北星学園大学大学院論集,9,13-30,2006 .
- 2) 日本スポーツ振興センター：平成28年度学校管理下の災害

2. 研究の目的

本研究は幼児教育におけるソーシャルキャピタルを核とした健康に関する発達資産を醸成するためのプログラムを開発するための調査を行うことを目的とした。具体的には以下の4点を目的とする。

幼児の発達資産を明らかにする。

幼児を育てる保護者の考えやソーシャルキャピタルを明らかにする。

幼児の発達資産を醸成するための幼稚園ならびに幼稚園教諭などが実施している健康づくりの実態を明らかにする。

発達資産を醸成するための幼稚園教諭や保護者のソーシャルキャピタルの向上と、環境づくりのための方策を考察する。

そのために、健康で望ましい幼児の姿、保護者のソーシャルキャピタルと健康、幼稚園ならびに幼稚園教諭の実態、地域における保護者のソーシャルキャピタル醸成に関する検討と調査を進めた。

3. 研究の方法

研究目的を達成するために、以下の段階を通して行ったことから、各段階での研究方法について述べる。

1) 幼児の発達資産

幼児が健康に発達するための要素を明らかにすることを目的として、機縁法にてリクルートした幼児教育に携わる者(以下、幼児教育者)3名と幼児を育てている保護者3名を対象に半構造化インタビュー法にてインタビューを実施した(一人当たり平均55分)。調査時期は2019年9月~10月であった。

インタビュー項目は発達資産の枠組みを参考にし、健康に育っていると思われる幼児とはどのような子どもですか 身につけたい特性や行動として、どのようなことが考えられますか

子どもが健康に成長、発達するためには、地域、幼稚園、家庭において、どのような経験をするのが好ましいでしょうか 子どもが健康に成長、発達するためには、地域、幼稚園、家庭において、どのような支援や働きかけ、社会的サービスなどがあるとよいでしょうか とした。

2) 保護者のソーシャルキャピタルと子どもの健康について

親のソーシャルキャピタルと子どもの健康について文献検討を行った。parent(mother, father), social capital, early elementally child, health を keyword として PubMed, CINAHL にて検索し、検出された研究論文42件について検討した。

3) 幼稚園ならびに幼稚園教諭の考え方

- (1) 幼児の健康課題と幼稚園教諭の考えを明らかにすることを目的として、機縁法により選定した幼稚園教諭で、研究の趣旨に同意を得た5名を対象にインタビューガイドを用いた半構造化面接を行った(平均30分)。インタビューは2023年8月に実施した。インタビューガイドの内容は、幼稚園の子どもたちと関わる中で、生活や健康について気になることや気がかりなこと、健康と思える望ましい子どもの姿の2点とした。
- (2) 幼稚園養護教諭の職務内容について明らかにすることを目的として、幼稚園に勤務している養護教諭6名を対象にインタビューガイドを用いた半構造化面接を実施した。インタビューは2022年2~3月に実施した。質問項目は、属性、一日の職務内容、幼稚園ならではの思うこと、幼稚園で働く上で大変なこと、とした。
- (3) 幼稚園で実施した保健教育の実践ならびに評価をした。養護教諭を志す大学2年生が幼稚園での保健教育を実施し、この実践の評価として在校生ならびに卒業生にグーグルフォームによる調査を行い、20名から回答を得た。また幼稚園教諭4人に自由記述による調査を行い、評価を得た。
- (4) 幼稚園の園長の幼稚園の役割や保育についての考えを明らかにすることを目的として、2023年11月に半構造化インタビューを実施した。

4) 地域における幼稚園を拠点とした保護者のSCと健康づくりの検討

健康寿命が高いA地区で子育てしている保護者の子育てに対する思いを明らかにし、ソーシャルキャピタルの醸成について考察することとした。A地区で子育てをしている保護者5名を対象に、2023年6月にグループインタビューを実施した。

4. 研究成果

1) 幼児の発達資産

幼児教育者は、健康に育っている子どもは、【健康的な生活習慣がある】【他者に対する思いやりの心がある】【自分の意思をもって行動する】【家庭生活が満たされて安定している】子どもであり、【身体を動かして遊ぶ】【思いやりを持って他者とコミュニケーションをとりながら協調できる】【自己肯定している】などの特性や行動があり、健康に発達するために【能動的に自分の意思で物事に取り組める】【家庭の中で愛される】【家族以外の人と信頼関係を結ぶ】などの経験が好ましいと述べていた。一方保護者は、【自分らしく豊かに感情表現できる】【身体を使って元気に遊ぶ】子どもが健康に育っていると、【健康的な生活習慣がある】【思いやりをもって周囲とコミュニケーションをとりながら協調する】【自分らしく伸び伸びしている】などの特性や行動、【家族以外の人と信頼関係が築ける】【家庭の中で愛される】などの経験が好ましいと述べていた。

健康な子どもとは「自分らしく感情表現する」「自分の意思をもつ」「元気にからだを使って遊べる」子どもであることが共通していた。身につけさせたい特性は「自分の好きな物ややりたいことがある」「学修する態度がある」「思いやりをもって他者とコミュニケーションをとれる」が共通して挙げられた。幼児が健康に発達するために、〔生活習慣がある〕〔よく遊ぶ〕〔家族に愛される〕〔家族以外の人との信頼関係〕〔他者を思いやる心〕等が要素として抽出され、「人とつながること」について多く語られていた。つまり、子どもの健康を支援するには家庭や地域社会のあり方が重要であり、今後はソーシャルキャピタルの醸成に着目した支援のあり方を検討する必要性が示唆された。

2) 保護者のソーシャルキャピタルと子どもの健康について

親のソーシャルキャピタルと子どもの健康について文献検討をおこなったところ、インドネシアなどアジア地域における調査が多かった。また、子どもの健康の指標も多様であり、健康そのものよりも歯の状態や体重など特定の疾患や症状を変数にして調査されていた。ソーシャルキャピタルの尺度も研究ごとに異なっており比較検討は難しかったが、ソーシャルキャピタルは経済状態との関連もあることがわかり、親のソーシャルキャピタルを醸成する構成要素を検討する必要があることがわかった。

3) 幼稚園ならびに幼稚園教諭の考え方

(1) 幼児の健康課題と幼稚園教諭の考え

健康面、生活面、発達面で気になること

幼稚園教諭は園児の生活や健康について気になることは、園児たちの【運動する機会が乏しく怪我することに慣れていない】【失敗を恐れて自分からは何もしない】【男女の違いに興味をいなく】といった心理行動面や【食事や排泄の習慣が自立していない】という生活のことと併せて、【保護者が子どもの成長発達を考えられない】という保護者のことも気になっていた。

望ましい子どもの姿

幼稚園教諭が考える、健康と思える望ましい子どもとは、【自分の選択ができる芯がある子ども】【自分がやりたいことができる子ども】【自分のことを素直に表現できる子ども】【元気に遊べる子ども】【いろんな人と関われる子ども】であった。

(2) 幼稚園養護教諭の職務内容と特性

幼稚園養護教諭について、幼稚園では保健組織活動はしていないと4名の対象者から聞かれた。一日の職務として、登園時の健康観察の傍らで保護者からの相談に応じたり、日中は各クラスを巡回して子どもたちの様子を見ながら必要に応じて保育をしたり、子どもが降園するまで常に園内を動き回っていることが特徴的であった。

幼稚園養護教諭の特性は、【保育者としての仕事も求められる】、【子どもからのサインとさまざまな情報をつなぎ合わせて支援する】、【文字ではなくイラストを中心に伝わるよう工夫する】、【一人一人の発達をみながら関わる】、【保護者との距離が近く、直接関わるが多い】、【子どもと一緒に行動しながら生活習慣を育む】、【安全に対してより高い意識がある】、【職員間の情報共有がスムーズである】、【周囲の学校保健に関する理解が乏しい】の9カテゴリーが抽出された。また、大変なことは、【周囲に同じ立場の人がいないこと】、【養護教諭の専門性が自他ともにわからなくなる】、【養護教諭の職務以外の仕事が多いこと】、【子どもとのコミュニケーションが難しいこと】、【保護者の立場を考えて関わる】、【未発達な存在ゆえに目も手もかけなければならないこと】、【幅広い知識が必要であること】の7カテゴリーが抽出された。

以上から、幼稚園養護教諭は学校保健を担う意識を高く持っているものの、保健の仕事以上に保育の仕事も担うことや子どもたちと言葉での意思疎通の難しさ、保護者との距離の近さといった幼稚園ならではの職務の特性があることがわかった。また、それゆえに頼校種と比べて自らの専門性について疑問を抱いていた。幼児期の健康支援を充実させるためにもさらに養護教諭の取り組みを明らかにし、養成教育へ反映させたり、専門職として幼稚園教諭との連携・協働することの必要性が示唆された。

(3) 幼稚園における保健教育の実践と評価

実践によって、学生たちは、子どもの成長発達が理解できるようになるとともに、保健教育のよい機会を得ることが出来ていた。また幼児たちは、健康に興味を持てるようになっていた。

表1 受講生の事後アンケート

評価区分	項目	とても思う		まあまあ思う		あまり思わない		ほとんど思わない	
		n	%	n	%	n	%	n	%
知識・技能	幼児期の健康教育の必要性が理解できるようになった	10	50.0	7	35.0	3	15.0	0	0
	子どもの発達段階に応じた指導の必要性が理解できるようになった	18	90.0	2	10.0	0	0	0	0
	子どもの成長発達の段階が理解できるようになった	7	35.0	10	50.0	3	15.0	0	0
	指導案の作成の基礎がわかるようになった	11	55.0	7	35.0	2	10.0	0	0
思考・判断・表現	仲間と協力して指導案を作成できるようになった	10	50.0	6	30.0	3	15.0	1	5.0
	園児が理解しやすい言葉使いができるようになった	3	15.0	15	75.0	2	10.0	0	0
	園児に対する声の大きさが理解できるようになった	6	30.0	9	45.0	5	25.0	0	0
	園児の発達段階に合った教材(熱中症、歯磨きなど授業のテーマ)を考えられるようになった	6	30.0	11	55.0	2	10.0	1	5.0
主体的に学習に取り組む態度	園児がわかりやすい教具(紙芝居・人形・模型など)を考えられるようになった	11	55.0	7	35.0	2	10.0	0	0
	集団の前に立って教える経験になった	17	85.0	3	15.0	0	0	0	0
	教室(教壇)で授業をするイメージが持てるようになった	7	35.0	7	35.0	6	30.0	0	0
	授業をやってみたいと思うようになった	7	35.0	6	30.0	6	30.0	1	5.0
総合	教材・教具づくりは楽しいと思うようになった	8	40.0	7	35.0	4	20.0	1	5.0
	養護教諭になるにあたって、自分の課題を見出せるようになった	6	30.0	8	40.0	6	30.0	0	0
	大学3年以後もしくは卒業後において、幼稚園での指導経験が役立ったと思いますか	11	55.0	5	25.0	4	20.0	0	0

表2 自由記述による学びの成果

早期体験の重要性	「具体的な養護教諭のイメージやその後の課題が具体的に掴めるようになった」 「幼児は反応も素直であるし、幼稚園教諭の指示の出し方は大変勉強になる。そういった面で初学者に向いているように感じる」
発達段階の理解や、発達段階に応じた指導の重要性	「子どもの発達段階の理解という意味ではとても参考になった。」 「大学時代において、幼稚園での保健指導以外で幼稚園児に接する機会はなかった。幼児期の子供を理解するには貴重な経験だったと思う」
保健教育実施の興味関心	「実習前は、人前で話すことに苦手意識があり、授業をすることに抵抗があったが、幼児の前で保健指導をすることで「授業をするのは楽しい」という感覚を体験することができた。」
理解しやすい話し方や教具づくりの理解	「子どもの発達段階を考えて教具づくりをすることや言葉づかいを考えることを学ぶことができた。」 「幼稚園でどんな指導を受けているかを考えて、現在関わる子供たちに何が必要か少し考えた」
その後の学習や実践での活用	「その後の教育実習などでも伝え方という視点をもって取り組むことができた。また、教員になって以降も、就学児や入学したばかりの児童への保健指導や健康診断時に、視覚的情報を多めに取り入れようと意識することが増えた。」
自信の高まり	「初めての保健指導を成功させたことで、自信につながった。」

(4) 幼稚園園長は、【親がやりたいことが実現できる場である】こと、【家族全員が楽しい気持ちになれる幼稚園である】ことを大事にしており、【卒園生が遊びに来たり親になったりして戻ってくる】と卒園後もつながっていた。また幼稚園は、【幼児は大好きなことがみつかることが大事であるという方針である】とともに【友達と楽しく遊び、よく食べる子どもに育つように保育している】ことを通して【子どもも親も先生達も幸せ感でいることが大事だと考えている】と語り、園長として【先生たちが成長しながら働き続けられるような仕組みをつくる】ことも考えていた。

以上より、子育てしている保護者にとって幼稚園の存在が大きいことが明らかとなった。幼稚園での経験やそこでのつながりがソーシャルキャピタルの醸成をもたらし、子育てしたい地域として続いていることを可能にしていた。幼稚園を拠点とすることで幼児期からの健康づくりが可能であり、保健活動を考える上で重要な示唆を得た。

4) 地域における幼稚園を拠点とした保護者のソーシャルキャピタルと健康づくりの検討

子育てしている保護者は、A地区は【自然に恵まれた安全な環境で子育てしたくなる地域である】ことで【親が不安やストレスがなく笑顔でいることが子どもにもいいという良い循環がある】ことや【地域の中で住民同士がつながれる仕組みがある】ために【ママ同士が気軽に話せる雰囲気である】、【地域の中でお互いに子育てし合える関係である】と語っていた。何よりも【子どもだけでなく親が楽しめる幼稚園がある】ことが大きく【子育てに理解と協力がある地域である】と語っていた。

以上より、幼児期からのヘルスプロモーションを考える上で、地域における保護者のソーシャルキャピタル醸成は重要であることは明らかとなった。特に、健康であるとされている地区の例を通して、子育てしやすい地域は住民同士がつながっていたり、特に子育て世代同士がつながる機会が多くあったり、夏祭りなど地域参加の機会が多くあることで、その地域で育った子どもたちがまた戻ってくるまちとして継承されていることがわかった。そのためにも幼稚園を拠点とした子どもの健康づくりのためのソーシャルキャピタルの醸成は、健康なまちづくりにもつながり、今後ますます取り組むべき課題であるといえる。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計4件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 三森寧子	4. 巻 20(2)
2. 論文標題 幼児期の発達を支える健康教育	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 子どもと発育発達	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 竹鼻ゆかり	4. 巻 20(2)
2. 論文標題 幼稚園における養護教諭の配置の現状と課題	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 子どもの発育発達	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 竹鼻ゆかり	4. 巻 73
2. 論文標題 養護教諭養成課程における早期体験学習としての 幼稚園での保健教育の実践と評価	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 東京学芸大学紀要 芸術・スポーツ科学系	6. 最初と最後の頁 291-299
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 三森寧子	4. 巻 -
2. 論文標題 幼稚園における健康教育の実践と課題	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 千葉大学教育学部附属学校園連携研究報告書	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計3件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 三森寧子
2. 発表標題 幼児が健康に発達するための支援についての一考察 - 保護者と幼稚園教諭へのインタビュー調査から -
3. 学会等名 第67回小児保健協会学術集会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 三森寧子
2. 発表標題 幼稚園養護教諭の職務とその特性
3. 学会等名 日本公衆衛生看護学会第12回学術集会
4. 発表年 2024年

1. 発表者名 三森寧子
2. 発表標題 幼稚園を拠点とした健康づくりに関する一考察 ニュータウンエリアのA地区の例を通して
3. 学会等名 日本地域看護学会第27回学術集会
4. 発表年 2024年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	朝倉 隆司	東京学芸大学・教育学部・名誉教授	
	(Asakura Takashi)		
	(00183731)	(12604)	

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	君塚 仁彦 (Kimizuka Yoshihiko) (00242230)	東京学芸大学・教育学部・教授 (12604)	
研究分担者	高橋 浩之 (Takahashi Hiroyuki) (20197172)	千葉大学・教育学部・名誉教授 (12501)	
研究分担者	竹鼻 ゆかり (Takehana Yukari) (30296545)	東京学芸大学・教育学部・教授 (12604)	
研究分担者	齋藤 千景 (Saito Chikage) (50618163)	埼玉大学・教育学部・教授 (12401)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関